

日本現代文學

全集

94

北原武夫井上友一郎・田村泰次郎集

日本現代文學全集 94

北原武夫

井上友一郎集

田村泰次郎

講談社

日本現代文學全集

94

北原武夫・井上友一郎・田村泰次郎集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷
昭和43年1月19日
増補改訂版 第1刷
昭和55年5月26日

著 者 北 原 武 夫
井 上 友 一 郎
田 村 泰 次 郎

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵 便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

裝 幀 櫻 江 征 治

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 株式會社 堅 省 堂

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106941-2253 (1)

(文1)

北原武夫集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

妻……………七

雨……………六

門……………三

朝……………六

マタイ傳……………六

聖家族……………二〇

作品解説……………淺見 淵 二三

北原武夫入門……………保昌正夫 二四

年 譜……………三九

參考文獻……………四四

井上友一郎集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

竹夫人……………一四三

菜の花……………一四五

寂しからずや……………一六六

受胎……………一六九

蝶になるまで……………一七三

月下の美人……………二六五

夜の四谷見附……………二七四

作品解説……………淺見 淵 四四五

井上友一郎入門……………保昌正夫 四三五

年 譜……………四三四

参考文献……………四四五

田村泰次郎集 目次

巻頭寫眞
筆 蹟

肉體の惡魔	二八五
沖繩に死す	三〇五
肉體の門	三二七
裸女のいる隊列	三三三
ある香港人	三七七

隱 沼	三四六
-----	-----

蝗	三六六
---	-----

失われた男	三八七
-------	-----

作品解説	淺見 淵	四一八
田村泰次郎	保昌正夫	四三七
年 譜		四三九
参考文献		四四六

北原武夫集

天目斜

昭和二年秋

北原武夫

妻

1

妻の長い病氣を看護している間、この美穂がもし死ぬようなことがあつたら俺はどんな氣持になるだろう、と私は時々考えていた。所が、あんまりそんなことを考えていたせい、いざその場になつてみると、私は私が考えていたほどに狼狽^{わんぱう}もしなければ取り亂しもしなかつた。變だな、女房に死なれた人間の氣持はこんなものなのかと、私は時々不思議そうに自分にそう云つてみた位である。けれども、私は間違つていた。死の記憶や人間の哀しみというようになもの、もつと眼につかない深い場所にあつたのだ。

美穂が死んで二三週間たつた春さきのある日、私は私のつとめている新聞社の用事で自動車を走らせていた。非常に急ぐ用事なのに、社を出たのが遅かつたのと、自動車がのろいので私は焦々していた。ある街角のひろい交叉點で、私の自動車はストップに引ッかかり、他のたくさんの自動車だのトラックだのの間に挟まつて長い間動けずにいた。私は何べんも時計を取り出してみたり、車の窓から顔を出してみたりしながら、時間に遅れる心配と腹立たしさとで、じつと坐つてゐることができなかつた。私は思わず腰を浮かし、おい、どうしたんだと、運轉手に聲をかけようとした。その時、私はふいに、ああ美穂は死んだんだな、ということに思い當つたのである。

美穂の病氣は急進性の肺結核で、腹膜と腸とを犯され、殆んど麻酔劑で保つてゐる状態が三月もつづいていたので、その間緩慢な死の發作が絶えず起きていた。新聞社で原稿を書いたり編輯したりしている机上に、危いからすぐ歸つてきて下さいという女中の電話が一週に一度はかかつてきた。その度に私は取るものも取り敢えず自動車を飛ばして歸つてくるのだが、その自動車が交叉點の信號に引ッかかつてぐずぐず手間取つてゐる間、美穂はもう死んでやしないかという心配で、私は幾度呼吸が止まりそうになつたか分らなかつた。最後の日は、同じような事情で、私の自動車が赤坂への交叉點で長い間じつと停止せられていた丁度その間に美穂が息を引き取つてしまひ、私はとうとう死に目に會えなかつたのであるが、約三ヵ月間のその焦々した車上の經驗が、こんな瞬間にふいに甦つてきたのだ。美穂がもう死んでしまつてこの世にはいないのだという觀念が、はじめてはつきりした形を取つて私に感じられたのは、恐らくその時であらう。春さきの午後の明るい陽差しが、まわりの自動車やトラックの上に暖かそうに射している日向の色を眼にしなが、私は何だか不思議な氣持であつた。

この私の焦々した腹立たしさの中に、今はもう美穂が死んでやしないかという心配の含まれていないのが、その時私には、とても寂しかつた。

この日から、美穂の死は、私の中で一種ちがつたものになつてきた。

特に彼女のことを思い出そうとしなくても、彼女はちゃんと私の記憶の深い所に生きていて、ちよつとしたきつかけでいつでも思い出せるんだと分つたことが、死に對する私の考え方をそんな風に變えたのであらうか。それまでは時々フツと美穂のことを考える時、彼女の死んだことを格別大袈裟に嘆き哀しんでいない自分自身を何となく後めたいように感じていたのだけれど、今度は一種の安

堵の心から、その死を悼む氣持に何か妙に親密な適度の甘さをさえ感じるようになったのである。そのせいであろう、時々私は、ほんとうに心から劬^{いた}わるような氣持で、ああ美穂は可哀想なことをしたなア、とつぶやくのであつた。不思議なことに、それは、彼女が生きている間は、決してそんなに素直に私の心が感じることのできなかつた優しさだつた。

この變化が、時によると、私自身をまごつかせた。社の机でぼんやり思いに耽^{ひた}つていて、「何だ、また死んだ女房のことを思い出しているのか？」などと同僚に云われると、私は何だかそういう同僚にさえ甘えたいような氣持になり、美穂という女がどんなに優しく愛らしい女であつたかということを、誇張してでも熱心に話して聞かせてやりたい氣持になるのであつた。その實、美穂という女は、時々私にそういう氣持を起させることはあつても、むしろ大部分はその反對の理由で私を苦しめてきた女であることを、私は自分でもちやんと知つていたのである。

2

私と美穂とは、六年間の同棲生活の間に三度別れた。それを知つていふすべての人々が、さも不思議そうに、別れたり一緒になつたりよくそんなことが出来たね、と云う。だが誰かが云つたように、「お伽噺を生活することは人を驚かさない。ただその思い出のみが人を驚かす」ものだ。今になつてみれば私にも不思議なのであるが、その時々にはそれが私にとつての眞實だつたのである。少くとも、一番最初に別れてすぐまた一緒になつた時は、心の何處かですでにもう後悔していながら、そうすることしかできなかつたのだ。おまけにこれは、たつた十時間別居しただけで、今云つた「三度」のうちに人は入らないのである。

美穂はその時十八で、妊娠していた。同棲したのはその年の春だつたから、知らない間にもう半年たつていたのである。そういう心

配ははじめからあつた筈なのに、私も美穂も慎重に計算して忍耐強く事を運ぶ方ではないので、あとになつての狼狽振りもひどかつた。まだ若すぎて父親になる氣の毛頭なかつた私は、子供々々した美穂がもう一人前にそんなからだになつたことが腹立たしく、何だか騙されたような氣持だつた。おまけに、私がもう來年は學校を卒業しなければならぬことだの、私の郷里の親達とはまだ何の交渉もしていないうちに、美穂の両親が家を引き拂つて下關に歸つてしまつたことだの、それらのこれから先をどうしたらいいかという心配がはじめから分つていたくせに、急に今になつて不安になりだすのであつた。

「ねえ？ あたしを棄てる氣じやないの、そんな顔して？ 大丈夫？ ……」夜、寝ていて、ふいにそんなことを云い出す美穂の眼が、だから私には、日増しに苦痛になつてきた。その眼をなるべく見まいとして、「大丈夫だよ、莫迦だな」と云つてゐる私の聲には、自分でもはつきり分るほどほんとしさがなかつたが、そんな時はどうせ出来っこないのが分つていながら、いつその女を棄ててやろうか、などとわざと無理な強がりを心の中で云つてみたりするのであつた。すると美穂は、「ほんとに大丈夫ね？ 棄てやしないわね？」と私に念を押し、「じやあたしを可愛いつて云つて！ とても可愛いつて云つて！ ……」と、甘えたからだを私に押しつけてくるのだ。そんな氣休めみたいなのを口先きだけで云つてみた所でどうなるものでもないのにと思うのだが、美穂が「うれしい！ もう一度云つて！」などとまだ催促するがまさに何度も口にしてゐると、可笑しなことに、ふと、私自身までそんな氣持になつたりするのである。そしてそのあとで、手足を横えて、もう寢息を立ててゐる美穂の顔つきを見ると、私は一層腹立たしくなるのだつた。こんなやり方で、さつさと自分だけ先きに安心してしまえる美穂が憎らしくて。

そういうある日の朝、つまらないことから私は美穂と喧嘩してし

まつた。妊娠して以来美穂はむくんだようになっていたが、焦々している私には、そんな顔つきまで不機嫌の種になった。それまでは美穂を可愛いと思う時の理由になつた少し陽に焦げたような彼女の皮膚の、今は頬べたに雀斑のしみ出ている蒼ずんだようなその色が急に眼障りになり、私は思わず吐き出すように云つてしまつた。

「顔は洗つたのか？ 頬紅ぐらいつけて、少しは化粧しろいいじやないか？」美穂はお洒落なくせに化粧するのが嫌いで、ほんとに時々顔を洗わないことがあつたのである。「あればつけるわ。あんた、買つてきてよー」「自分で行つて、買つてきたらいいじやないか」「イヤよ。こんなからだしてて」「ふん。そんな顔みてる、飯まで不味くなる」

キャッ、というような聲を、美穂が出した。驚きとも憤怒とも、ちよつと云いようなない聲であつた。だが、その聲は、ほんとうは美穂の方ではなくて私の方で出すべきであつた。食卓の上のものを、いきなり取つて投げつけたのは美穂なのだから。御飯に味噌汁をかけて食べかけていた美穂の茶碗の中のを、そのまま頭から浴せられて、私は聲が出なかつた。だが、自分でもびつくりしたように眼を大きくしている美穂が、私のぶざまな恰好を見て、ふとクスンと笑い出しそうになつたのを見ると、私はのぼせ上つてしまつた。突嗟に、何てことするんだと自分で思いながら、私はねじ伏せた美穂を夢中になつて打ちのめしていたのである。「もう貴様なんか出て行け。何處へでもいいから、もう二度と歸つてくるな、いいか」そんな言葉も、私は自分でははつきり分らずに叫んでいたのである。

美穂はそのままアパートを出て、近所に別のアパートを探して歸つてくると、その日の夕方、アパートに入入っている八百屋の若い亭主と一緒に荷物を荷車にのせて越していつた。心の中では、なアにいざとなれば女の方から何とか云い出すだろうとたかをくくっていた私は、美穂が少女に似合わず案外に大膽そうなのを見て、却

つて何も云い出せなかつたのである。はじめて一人になつた寂しさよりも、この意外な美穂の冷淡さに自負心を傷けられて、私はその夜長い間眠れなかつた。翌くる朝、八百屋の亭主に聞いて美穂の越していつたアパートにわざわざ出かけていつた途々も、私自身ではまだ、自分が美穂に未練があるのだとは思つていないのだつた。けれども、ちよつと何處かに出かけていて美穂のいないその新しい部屋で、一人で美穂を待つている間に、私の心は急に別のものになつてしまつたのだ。

あとから聞くと、その隣室にいた男は、近くの蒲田の撮影所の下ッ端の俳優だつたのだそうだが、ふとその部屋で咳をする男の聲が聞え、次いで扉の開く氣配がしたので、私が廊下の方を振り向くと、その男も部屋を出てきて私の方を振り向いた時であつた。いかにも映畫俳優らしいその男の顔をちらと見ただけで、私は取り亂してしまつた。急いで部屋を飛び出し、アパートの入り口の路地の電柱によりかかつて、そこで何處からか歸つてくる美穂の姿を待ち受けながら、私ははじめての嫉妬でからだが慄えていた。ちよつと、十二月の日の正午近い陽差しが、暖かく足許までひろがつていた。こんな恰好でしよんぼり俺は女を待つている。私はふと、郷里の家の廣い庭のある縁側に坐つている父の顔を思い泛べ、ついさつきとはまるで違つた氣持でこんなことを考えるのであつた。「そうだ。いずれ美穂のことは正式に親爺に話さなければならぬが、ありのままに話すと美穂が悪い女に思われるだろうから、こんなことのあるつたことはその時黙つていてやろう……」と。

美穂の顔を見た時、私がどんな顔になつていたか、私には分らなかつた。美穂が馬鹿にしたような、ちやんと分つてたわよというような眼つきをしたのを見ると、私はきつと、みじめな、女に弱い男の顔つきになつていたのであらう。何を買つてきたんだと、口に出してみると、聲だけはまだ怒つていような云い方で、私は美穂を抱えている紙包みのことを訊ねた。「これ？ カーテンとエプロン

と、それからお書のお赤飯よ」そのまま美穂は歩き出した。ちよつと立ち停っている間に明るい日向で見た美穂の顔の、やつぱり紅もつけずに雀斑のしみ出ている頬べたのむくんだような色が、今度は反對に、まだ瘦我慢しようとする私の足を苦しく引きずつていった。私は、自信を喪つていたので。

美穂は、なかなか歸るとは云わなかつた。私はそれでも美穂の承知する最後まで、隣室の若い男のことは口に出さなかつたが、やつときまつて、抱こうとした手を美穂がぐつと押しのけた時、カッと取り亂して云つてしまつた。「ふん、妬いたの？ 莫迦だわ、この人……」美穂は、さも面白そうに、クスンと笑つた。この笑ひ方が、私の自尊心を傷つけるのだつた。人間とは、何という自分勝手なものであらう。とにかくこれでもう美穂が自分の許に歸つてくるのだと安心してしまふと、私はさつきまでの苦しさを忘れてこの少女が急に憎らしくなり、もはや何の興味もない下らない女に見えて、さも分別のある鹿爪らしい顔になりながら云うのだつた。「お腹に子供がいるのに、一人になつたらどうする氣でいたんだ、お前は？」「どうだつていいじゃないの、そんなこと。本氣で考えてもいないくせに、今になつて可笑しいわ。何よ、すぐそんな偉そうな顔して。だからあたし、あんたが嫌い……」

私は黙つた。眼に涙が上つてきた。この憎々しい、いざとなるとどんなことでもやりそうな娘が、私にはまた、二人とかけ替えのない女のように思われるのだつた。

3

その翌年の冬、美穂は家出をした。今度は生れたばかりの子供を残して。

その頃私は、ある新聞社の支局につとめることになつて横濱に家をもつていた。本牧の丘の上の樹木の茂つた中にある家で、學生時代の學費より少い月給ではとても住めなかつたのだが、家賃や月々

の生活費の大半は郷里の父が出していたのである。この港町には父の知人が多いので、それらの誰かが私を訪ねてくるようなことのある時、父は自分の息子があんまりみすばらしい家に住んでいるのを見られたくなかつたのであらう。美穂との正式の結婚は許そうともしないのに、こんなことをする私の父のやり方が、美穂にはとても頼にさわつたらしかつた。「子供に籍のことなんか知らん顔してゐるくせに、あんたのお父さん、とても見榮坊なのね。よく似てるわ……」と、美穂はさも輕蔑するように冷笑していた。籍のこともあつたが、私の父に比べ、一人娘の美穂を體よく私に預けたような形で下關に歸り、そこで小さな借家住いをしてゐる彼女の父の貧しさが、勝氣な美穂には堪えられなかつたのであらう。一つにはそのために、美穂の両親はやがて私が養うようになるのを待つてゐるのにちがいないと私の郷里では考えていたので、一人娘ということをお口に、私たちの結婚を許さなかつたのである。

子供は、暑い眞夏の夜明けに生れた。ちようど前夜から來ていた父は、ちゃんと着物を着換えると、ぼんやり廊下に突ッ立つていた私を机の所に呼んだ。そして紙に「ミチ」と書き、女の子だそうだがこういう名前はどうか、と云つた。「朝になつたら、すぐ電報を打つて來なさい。お前には話さなかつたが、赤ん坊は美穂の妹として届けるように下關の方と話を決めてあるからな。いいか？」女だつたらミチ、男だつたら道夫と、父はもう汽車の中で考えていたそのである。私が黙つてゐると、父は少し顔を赤らめながら、しかし押しつけるように云つた。「こうしとけば、いざという時に面倒がないからな、お前もその方がいいだらう？」私は、漠然とした頭で、そうですと答えた。父はずつと前から、自分から強いて私たちを別れさせようとはしなかつたが、二人が自然に別れる時の一日も早く來ることを望んでいたのだ。だがそれを知つていながら、敢えてそれに反對しようとしないう私の氣持が、私自身にも不可解だつた。明日になつたらすぐ別れると云われたら、躍起となつて反對す

るにちがいないのに、將來別れる時に都合のいいような用意のできているのを見ると、ホッと安心するのである。はじめての子供と新しい孫とが生れ出た夜に、こんな風な氣持でいる私たち親子の姿が、私の眼にも淺ましいものに見えた。肥つた顔に具合惡そうな微笑と汗とを浮べている父に、それから私自身に、私はその時眼を反切れないような氣持になつた。利己的なくせにその通りには強くなり切れない私たちの弱さが、私には何となく恥かしかつたのだ。この奇妙な矛盾した氣持が、美穂が家出したと分つた時、たちまち私を狼狽させるのだった。

その夜、家の中は森としていた。玄關を上つて、雇つたばかりの小さい女中がミチを背負つて廊下を行つたり來たりしているのを見て、「どうしたんだ」と訊ねると、女中は「奥さまが夕方お出かけになつて、ちつともお寝みになりませんので……」と、暗い心細そうな眼つきをして答えた。この小さい女中は、美穂にとつて唯一人の話相手だつたので、いつもいろいろのことを彼女から打ち明けられていたのである。美穂が外出したのではなくて、實は家出したことを知つている女中は、「そうか」といつて、そのままいつものように書齋に入つていつた私の姿が氣の毒なものに見えたであらうが、私の方では、いつもそのまま自分の部屋に下る女中が、今夜に限つていつまでも寢室でミチに付き切りで寝かしつたり世話を焼いたりしている様子が、ふと氣にかかつた。私は、思い切つて女中を呼んだ。それから、女中が廊下を渡つてきて襖の向う側にしゃがんだ時、私は彼女が襖に手をかけないうちに狼狽して、しかし何氣ない優しさで聲をかけた。女中に顔を見られるのが、その時私には何だか恥かしかつたのだが、今まで一度も感じたことのないそんな恥かしさを感じたことに、私は突嗟に妙な不安を覺えたのである。

「奥さんは何時頃出かけたんだ?」「四時頃でございました」「何時頃歸つてくるか云つて置かなかつたのか?」「はア、別に」「何處へ

行くとも云わなかつたのかい?」「はア……」私はなおもいろいろ訊ねようとして、その自分の云い方が我知らず、まるで美穂がもう家出したと思ひ込んでゐるような調子なのに、ふと愕然となつた。

私は「もういい」と怒つたように云い、それからすぐ「なに、もうじき歸つて来るだろう、きつと……」などと、わざわざ口に出してさり氣なくつぶやいた。女中にも私自身にも聞えよがしに。女中は、襖の向う側を去つていつた。私の机の引き出しに奥さまの書き置いていつた手紙がある、と女中はその時よほど云いたかつたであろう。けれども、田舎で育つた十六歳の素朴な少女には、この愚かな弱い若者の取り亂した姿も、一人の氣難しい主人に見えたにちがいない。女中の足音が、廊下を遠ざかつていつた。私は、落ちつこうとして眼をつぶつた。

次の間に行き、念のために簞笥を開けてみたり、押入れの行李の蓋を取つてみたりしている間も、私は「可笑しいな、變だなア」などつぶやいてゐた。そして心配していることがだんだん事實にちがいない風になつていくのを見ると、時々ぼんやり手を休めて座敷の眞中に突ッ立ち、頭の中で、「やつぱり家出したのかな。家出なんて、小説では随分讀んだことがあるが、それじゃそんなことがいよいよ俺の家にもやつて來たのかな」などと、妙によそよそしく空ろな氣持で考えたりした。最後に、もう一度書齋に戻つてきて、偶然美穂のその手紙を見つけ出した時、私はただ冷やりとなり、變な薄笑いみたいなものを頬に泛べるのであつた。

まだ夜は九時頃であつた。私はともかく櫻木町驛に行つてみようと思ひ、妻のいない家に小さい女中と赤ん坊を置き放しにして、家を出た。氣持は急いでいたが、私は自動車を拾わずに、わざとのろくさい市電に乗つた。櫻木町につくまでの間に、その市電の中で、もう一度美穂の手紙をよく讀んで考えてみたいと思つたのだ。灯ばかりが明るくて人氣がなく、時々がたんと心細く揺れるうそ寒い電車の中で、私は寒さのためではなしにがたがた慄えながら、何

度も手紙を読み返した。「貴方はお坊ちゃんでも何も知らないのです」と、その手紙の一個所で美穂は書いていた。「両親が食べるに困る時のことを思うと、私はどうしたらいいか分らなくなります。私はもう一ヵ月前から考えていたのです。ミチは當分たのみます。一人で暮せるようになつたらすぐ取りにいきます……」ちえッ、何を云つてやがるんだ、と私は口の中で云つた。だがそれと同時に、思わず冷やりとなるのだつた。一ヵ月位前から時々美穂が何気なさそうに私に向つて、「ねえ、もしあたしがなくなつたら寂しい？」とか、「あたしのことなんかすぐ忘れて、あとの人を貰う？」とかと何度も訊ねたことや、前日の晩サンドイッチを皿いっぱい作つてもつて来て、「美味しい？ ほんとに美味しいの？」などと何度も執拗く訊ねていたことなどを、私は今になつて思い出したのだ。それが、私がそれとは知らずに度々その上を通りすぎていた危険な場所だつたのだと思うと、私はそういう自分の不用意さには腹を立てずに、騙されていたという氣持だけが先に立つたのであつた。

櫻木町驛について、私は手荷物ので、美穂の名前の荷物が一時預けになつてゐるか否かを訊き、やはりそうでなかつたのを知ると、一應郷里の父に電報を打ち、品川までの切符を買つた。もしかしら品川驛に荷物を預けてありはしないか、そうとすれば美穂の行き先も大體見當がつくと思つたのである。どうしてそんな風に頭が働いたのか、私には分らなかつた。多分九ヵ月ばかりの新聞記者の経験が、自分ではそうなるつもりはなくても、知らないうちに役に立つたのであろうか。省電の中で揺られながら、私は「なるほど、俺もいつの間にか新聞記者になつてゐるんだな」と思い、「これがほんとに社會部の事件で、美穂ではない誰かよその人妻の家出を追ッかけてゐるんだつたら、俺はどんなに幸福だろう……」などと思つたりした。平生とちつとも變つてゐないあたりの乗客を眺めながら、私はその時、新聞記者ほど哀しい職業はないと、一人で心の底から思うのだつた。私はその夜、品川驛のベンチの上に、夜中

の一時過ぎまで坐つてゐた。豫想した通り、美穂の名前の柳行李が一つ一時預けになつていたので、もしかしら美穂が取りに来やしないかと思つて待つてゐたのである。美穂はとうとう來なかつた。その間私が、そこばかり一生懸命に注意して眺めていた手荷物の所に現われたのは、女といへばどれも野暮ッたい普通の服装をした、何でもない女の姿ばかりであつた。そのために、お洒落だつた美穂のことを私は却つてよけいに懷しく思い出さねばならなかつた。

4

美穂は、赤坂溜池にある「ソワアル」という酒場^{サウアル}にいた。その翌くる日社を休んだ私は、朝から東京に行き、途中あつちこつち心當りを歩いたので、「ソワアル」についた時は夜になつてゐた。

その酒場は、以前銀座裏にいてボーリンという名前で通つてゐた女のやつてゐる酒場で、そのボーリンとは彼女が私たちと同じ大森のアパートにゐる時に知り合ひになつたのである。どうしてボーリンなどと呼ばれてゐるのか分らなかつたが、いつだか何處かの映画會社で「デイトリッヒに似た女」というのを募集した時一等に當選したことがあり、何處かそんな風な外國人じみた容姿が、自然にそういう呼び方をさせるようになつたのであろう。美穂もボーリンという名前だけは知つていて、彼女と同じアパートに棲むようになつてからは毎日のように行つたり來たりし、そういう「有名な」女と友だちになれるのをとても喜んでゐた。私ははじめから、美穂の女學校時代の友だちは東京にたくさんゐるのだが、きつとこの女の所に行つたのではないかと、何となく感じてゐたのだ。というのは、美穂の家出には他にいろいろの理由もあつたであらうが、一つにはこういう種類の女のゐる世界への好奇心も随分混ざつてゐたように思われたからである。この想像は、やはり當つてゐた。

ボーリンは私を見ると、「暫らく」と何でもなさそうに愛想笑いをしたが、私が美穂のことを云うと、ゐるともいないとも云わずに

「あの人のことはとにかくあたくしがお預りしましたから……」と、女優のような笑い方をするのであつた。それから、「あの人も折角自由の身の上になつたのですもの……」とつけ加え、一種の誇らしさの意味を、その云い方の中に籠めるのだつた。私は、そのポーリンのアイシャドウを塗り込んだ青ッぱいような眼を見ているうちに、急に美穂が可哀想で腹が立つてきた。ポーリンの方でも、私の云い方に誇りを傷つけられたらしい。「そんなに仰言るんなら、とにかくお会いになつてみるというわ」と、いきなり立ち上つて階下へ降りていつたが、そのポーリンの私の輕蔑に腹を立てたらしい氣持が、間もなく階下から上つてきた美穂の顔色にも、ありありと出ているのだつた。

美穂は私を見ると、「どうしてここにゐることが分つたの？」と云つた。たつた一日で分つてしまつたのが不満のような云い方であつた。その美穂が、あとから聞いたらポーリンのを借りたのだそうだが、胸に造花の薔薇をつけた紅いイヴニングドレスなどを着て眼のふちを化粧し、それがまた素敵に美穂によく似合つているのを見て、私は聲が出なかつた。不思議なことに、この美穂の姿を見たら、この時まで一度も胸に泛んだことのないミチのことを、そのミチが灯の暗い家に女中と二人切りで待つてゐることを、私はふいにはつきりと思ひ出したのである。私の云い方は、知らず識らず、ここに來る途々私の考へていた優しいなだめるような口調を、自分から裏切つてゐた。

「だからあんたはお坊ちゃんだなんて、みんなに云われるのよ。莫迦ね。女に逃げられたくせにとでも自信ありそうな顔してるって、今もポーリンが云つてたわ」美穂は、冷めたい、刺すような笑い方をした。「あんたが毎晩遅く歸つてくるのを、妬いたりなんかしたんじやないわよ。もう馬鹿々々しくつて仕様がなないの。家を出ようと思つたのは、あの手紙には一カ月前から書いたけど、ほんとにミチを産むずつと前から、一人で毎日考へてたのよ。女中だつて

ちやんと知つてたのに、あんたにはそれが分んなかつたの？」

美穂の顔つきはあんまり冷刻で、上の空の微笑などを泛べているので、却つて他人の眼にはいかにも愉しげに、そして私に會つたのが嬉しげにさへ見えたのかも知れない。壁によりかかつていた美穂と同年ぐらいの女が、氣を利かしてつと立つて來、酌がないままでいた卓上の麥酒をとり上げて私に酌どうとすると、美穂はその顔つきのままでその女に笑いかけ、平然とした聲で云うのだつた。まだよくは馴れてゐない職業的な云い方で、「いいのよ。此處はあた

いがするから——」
私は、力を喪つて、美穂を見た。どんなにでもできると思つていた妻という觀念から抜け出して野性に還つたような女の姿が、この時ほど私に残忍に見えたことはなかつた。この決定的な冷めたさがふいにはげしい未練で私をいつばいにさせた。「何よ、莫迦ね」愚かな眼つきになつて、彼女の手を取ろうとした私を押しのけると、美穂は狡るような笑い方をして云うのだつた。「今はそんなこと云つても、あんたは駄目よ。二人ッ切りになれば、ちつともあたしを可愛がらないんだもの。ちやんと分つてんの。だからイヤ——」

私は、思わず眼をつぶつた。心が、灼けつくやうであつた。その心の中で、私はふと、「俺はこうやつてこの女のために、一生こんなことを繰り返して駄目になるんじやないかな……」と、我ながら傷ましく思つた。だがそう思いながら、不思議なことに、そうやつて彼女のために一生が臺なしになつてしまえばその方が却つて嬉しような、何か妙に酷たらしい氣持が、その時私の中にあるのだつた。

その晩、やつと美穂をなだめてとにかく横濱に連れ戻つた時は、もう深夜であつた。

その自動車の中で、美穂は私に、「でもあたし、あんたと元通りになるのは可厭よ。分つてるわね？」と何度も念を押し、二人が早

く別れられるように私からも努力することを、何度も私に約束させるのであつた。私は云われた通りに約束した。考えると奇妙な約束だが、とにかくその時の私は、美穂の機嫌を損ねてまた家出をされるのが怖かつたのだ。

所が、家に歸りつくと、私の氣持はまた變つてしまつた。家にはちようど、電報を見て郷里から上京した私の父が来ていたが、私と二人切りになつた時、父は聲を低めて忌々しげに私に云つたのだ。「折角自分から出ていつたのを、お前は何だつてわざわざ連れてきたんだ。馬鹿な奴だ。放ツとけば、そのまようまい具合に別れられるじゃないか？」私は、「そんなひどいことができるもんか。僕はいいけど、あとに残るミチが可哀想じやありませんか」と言下に、むきになつて云い返した。私は父が憎かつた。だが同時に、ハッと思ふのだつた。美穂が歸つてきてみると、私はもうそろそろ自分の意氣地なさを後悔しはじめていたからだ。

このどつちつかずの氣持が、それから正式に美穂と別れるまで、約四ヵ月間ぐずぐずと私を支配していた。

つとめ先きである支局の編輯室や、官廳の四階にある記者俱樂部の窓際で原稿を書いている最中、私はふと、もしかしたら美穂はまた家出してやしないかなと思ふことがあつた。すると私は、そう思つただけでドキンとなるのだつた。妻が自分を棄てて家出しているとも知らず、何の氣なしに歸つて來て玄關の戸を開ける男の氣持の傷ましさを、私はもう二度と味わいたくなかつたのだ。この恐怖からだけで、私は友人と並んで坐っている映畫館の席からふいと立ち上つたり、用事を作つて支局を早退けしたりしては、時々狼狽てて家に歸つてきた。こういう氣持が、愛情とは凡そ遠いものだということとを、私も知つていた。その證據には、家に歸つてきて美穂がちやんとしてゐるのを見届けると、私は安心すると同時にこんな心配をさせる美穂が憎らしくなり、延び延びになつていてどつちともはつきりしない別れ話のことを美穂が催促するのに、わざと返事として

やらないのだつた。

いつたい私は美穂と別れたがつてゐるのか、それとも別れたくないと思つてゐるのか、私は時々自分で考えてみた。だがそんなことをわざわざ考えてみるということが、私の本心を説明していることだつた。私は美穂とは別れたかつた。けれども、いざ別れると決まるとその日の來るのが怖かつた。そこで私は、別れると決まつてゐることに安心した氣持で、別れる日を一日延ばしにわざと遅らせていたのだ。

こういう私たちは、決して愛し合つてゐるとは云えなかつた。けれども、夜になると私は寂しさに堪えがたく、美穂もまたそれを拒もうとはしないのだつた。そんな時、女である美穂にはもつと怪かの氣持が極く自然に加わるらしく、美穂は「ねえ！」と別の人間になつたような聲を出し、急にのぼせたやうになつて云い出す時があつた。「別れてからでも、あんた、時々あたしに會つてくれるわね？ ねえ、云つて！ あたしを忘れやしないって云つて！」それから心から嬉しそうに、まるで戀人になつたばかりの女のようにこうつけ加えるのであつた。「ほんとね？ 別れてから會えば、あんた、きつともつとあたしを好きよ！……」

5

三月のはじめに、私たちは正式に別れた。ミチは美穂が育てることになつて、一緒に下關に連れていつた。

別れてしまうと、私はぼんやりしてしまつた。

別れる時までぐずぐずしていたので、家を整理して世帯道具を道具屋に賣つてしまうと、すぐ身を落ちつける所が見つからないので、私は一ト先ず支局の宿直部屋に住まわせて貰うことになつた。編輯室と便所の間にある六疊ばかりの部屋で、疊は割合に新しいのだけれど、いろんな人間が靴のままずかずか上つたりしていたの